



目からウロコの中東の常識・非常識

中東 酒井啓子

東京外国語大学
言語文化研究科教授
（イラク政治）



第5回 この(中東)映画がおもしろい!

- ④ 弟子(以下、⑤) 師匠、こぶさたてす。
- ⑤ 師匠(以下、⑥) んー。
- ⑥ エジプト人のタクシーの運ちゃんや、イラク旅行記なんかで半年、解説さぼってましたもんね、師匠。
- ⑦ だってー、イラクでは米兵がどんどん死ぬし難民は溢れるし、レバノンではよくわからない勢力が暴れてるし、パレスチナも内紛だし、もうぐちゃぐちゃなんでもんー。
- ⑧ て、アンタが言ってるよーする。
- ⑨ ところで、こないだパレスチナの自爆テロの映画を見たんですよ。「バラダイス・ナウ」っていう。
- ⑩ パレスチナ人の若者2人が、イスラエルに自爆攻撃しようとする、その過程の心理的葛藤を描いた映画ね。パレスチナ人の監督が撮って、去年のゴールデングローブ賞の最優秀外国語作品賞を取った。
- ⑪ 最初は2人とも占領下パレスチ

ナの閉塞した状況のなかで、イスラエル支配に反発して、自爆を目指す。一世一代の暗れ舞台として意気込んだけど、彼らを起用した組織との連絡がうまくいかなくて失敗しちゃう。それから2人の自爆への認識が変わってくるんですよ。

⑫ そう。最初は自分たちが抵抗運動の英雄に「戦士として選ばれた」ということで、華々しい気持ちだったのが、「自爆でイスラエルを攻撃する」ということの意味を改めて考えるようになる。それで最初熱心だったほうの若者は考え直すのね。でももう1人の、付和雷同的にくっついていったほうが逆に、「人間の尊厳を冒される」ということはどういふことか」といったことをマジで考え始めて、独自に行動するようになる。

⑬ 最初は、「あー、やっぱり無知な若者の不満や出口のなさを組織が利用して、自爆に誘導してるのかなー」

と思って観てましたが、この映画で最後、自爆を覚悟するほうの若者は、そうした組織の胡散臭さや周りの声をしっかり見据えたうえで、それでも自爆を選ぶとする。そういうストーリーでしたよね。

⑭ 同じような話が、最近翻訳小説で出版されてるね。ヤスミナ・カドラという、在仏アルジェリア人の作家が書いた、その名も「テロル」(早川書房)。

⑮ こちらは、パレスチナ人だけとイスラエルで社会的に成功している医者が主人公。突然、自分の奥さんが自爆テロ事件の犯人だったと知って「そんなはずない! 自分とのリッチな生活に満足してたはずだ!」と信じて疑わない主人公が、カミさんの過去の足跡を追う旅に出る。

⑯ 「バラダイス・ナウ」は、最初からイスラエルの占領でどうしようもない状況に置かれた若者の行動とし

ての自爆だったけど、「テロル」はパレスチナ社会の悲惨な現場から離れていた主人公が、奥さんの行動を辿る過程で、どれだけ占領地がとんでもないことになっているか、ということを再発見していく話。行くところ行くところ、自分たちの故郷、昔ながらの家が理不尽にブルドーザーで潰されていくのを目の当たりにして、そして、その度に誰かが自爆に走るといふ現状を、目撃する。

⑰ それでもキーワードになっているのが、「これだけ尊厳を冒されて!」ってことだね。

⑱ でも医者である主人公は、最後まで「自分の仕事は人の命を救うことなんだ」という自覚を、繰り返して言ってますよね。

⑲ 「バラダイス・ナウ」でも、最初調子よく自爆計画に乗った若者が、失敗のあと、パレスチナ人大物革命家の娘にこんこんと説教されるシー



ンがある。「自爆なんかじゃなくて、別の方法でイスラエルをやっつけてやるな」と言っていた。⑧ それって、自爆に聞かせるんだけど、でもその本筋が通らない。⑨ 今回のパレスチナが狂気⑩ 満ちていること。⑪ ちがう。「パラダイス・ナウ」とか「テロル」でも、そういう正論をちゃんと提示していて、自爆を暗れ舞台と考えていた若者が正論に接して考え直す、という過程もちゃんと描いている。でも、正論も客観的な判断もいろんなことを十分考え抜いたうえで、それから成功した医者や妻という立場を捨ててもなお、自爆を選択せざるを得ない、そういう環境が厳然とある。これらの作品がすごいのは、そのことに焦点を当ててるところだよな。

「パラダイス・ナウ」の大物革命家の娘（アラファトの娘、みたいな設定か？）とか、「テロル」の医者とか、どちらも自爆もイスラームも礼賛してないよね。むしろ、逆。「テロル」の作者なんかは、元アルジェリアの将校だった。アルジェリアって長年軍事政権が続いたあとイスラーム勢力が台頭して、それはもう悲惨を極めた内戦が10年近く続いた。その経験から、イスラームを騙った暴力には辟易してるんだと思う。にもかかわらず、自爆の方向に吸い込まれる人々が後を断たない事実には、愕然としたまま立ち尽くしている、っていう感じ。

中 東映画で描かれる
スゴいアメリカ人像

⑫ それにしても、そこまでに至る閉塞感つか、フラストレーションで、なんか想像できないんですけど。映画で描ける現地の状況なんて

せいぜい2時間分だから、なかなか伝わらないんだけど、これが三世代にわたって続いていると思ってみようんざりもするよね。その、「俺たちはこんな酷い目にあってるんだ！」的映像をがまん盛り込んだ映画が、「グアンタナモ 僕達が見た真実」とか「イラク 狼の谷」。

⑬ 「グアンタナモ」は、イギリス映画ですよな。パキスタン移民二世のイギリス人青年4人が、結婚式のために故郷パキスタンに行ったのに、何を思ったか米軍のアフガニスタン攻撃の前夜にふらっとアフガニスタンに入国しちゃう。で、戦争に巻き込まれて死ぬ思いをしたあげく、米軍につかまって「アルカイダだろう!!」と拷問されて、悪名高きグアンタナモの米軍基地に2年以上も拘禁される。

だよな。

「イラク 狼の谷」のほうは、トルコ映画で、去年トルコで大ヒットしたアクションもの。イラクで米軍がいかにひどいことをしているか、虐待されるイラク人の側に立って、トルコ人諜報員がランボー並の大活躍をする。事実関係は織り交ぜているものの、全体にかなり荒唐無稽。

でも注目すべきは、「俺たち」とその仲間（は、こんなに米国にひどい目にあってる、それに対して、反撃食らわしてやればどんなに気持ちいいだろう」的ムードが、中東では蔓延してるってことだよな。

⑭ それにしても、ここで描かれているアメリカ人は、ちょっとひどくないですか？ 見るからにアブナイ、危険な悪役顔で。イギリス人医者も、マッドサイエンティストみたいだし。⑮ だって、ハリウッド映画はずっとそうやってアラブ人を描いてきた

じゃん！ ひげ面のトンデモなテロリスト顔で出てきたじゃん！ 欧米人だって、ちょっとはステレオタイプの悪役で描かれてみればいいのよ！ そしたら少しは癒るでしょに！

⑯ ……ここらこち。

⑰ ともかく、「俺たち」とその仲間がとんでもなくダンアツさされている」という意識は、パレスチナやイラクだけじゃなく、中東やイスラーム社会全体に広がってるんだよね。でもそれって、別に「イスラーム」とか「宗教」と密接に関わっているわけじゃない。信仰心が昂じて自爆してるわけじゃないよね。

⑱ 映画で描かれる女性って、「イラク 狼の谷」は別にして、あまりイスラームイスラームしてないですよな。イスラームの女性っていうと、ベールかぶってるイメージだけど、「パラダイス・ナウ」の、自爆に向か

う青年のかあちゃんなんか、家事する主婦の類被り程度。

⑲ 「パラダイス・ナウ」の、大物革命家の娘なんて、むちゃくちゃカッコいいじゃん！ 美人じゃん！

同じパレスチナ映画で、2002年にカンヌで審査員賞を取った「D-I」があるけど、ここに出てくる主人公の恋人なんか、ストレートの長髪なびかせてボディコン（死語）で、イスラエル兵を前に堂々と検閲突破する。シャロン・ストーンが羨ましがったくらいカッコいいもんね。

⑳ ……なんのこっちゃ。



「グアンタナモ、僕達が見た真実」
3990円
(株)クロックワークス 発売中
©2006 Tizen Film Limited. All Rights Reserved